

## マージナル・マン理論と比較思想

——日本とイスラーム知識人——

佐々木 英 一

思想というものは例えそれが社会的なものとのつながりが無視できないとはいえ、個人の内面のドラマから生れてくるものである。

故にそれは了解的、追体験的なアプローチ、我々ひとりひとりの主体的なとりくみによって意味をもってくるのである。

比較思想論もかくの如き実存的な試みを為す土俵とすることが可能であろうか。

方法的にそれはある思想家の自伝とか日記・書簡が重視されること、しかもそれらを出来るだけ了解的、追体験的にみるという手法をとらざるをえなく、類型的、体系的な立場からみれば主観的との識りを免ぬがれない。

主体的・実存的なアプローチと東西思想の体系的・類型的な理解との両者を統一する地平はマージナル・マン理論を採用すること

とによってある程度可能となるのではないであろうか。

マージナル・マン理論とは人種の垣塙・アメリカの *Border* などによって開拓された社会学上の理論である。メソチン・ムラットの如き混血民やユダヤ人の社会学上の性格は古くから関心をもたれた。例えばユダヤ人が青年期にユダヤ文化の影響下に育ちながら後、アメリカに移住した場合、ユダヤ伝統文化とアメリカ文化との二つの文化の影響をうける結果、きわめて独特な性格が形成される。すなわち自意識過剰、反省心の強さ、情趣的不安定、物事への醒めた合理的姿勢等々。

さてマージナル・マンとは右の例のように単なる人種間のそれを指すのみならず、エートス、イデオロギーその他あらゆる文化現象についてもいうことができる。すなわち一つの文化、価値体系にとっぴりと埋ることができず、さらばといって他の文化体系に

も、充分にはコミットできないところの状態をマージナルな状況と  
いうのである。

かくの如くマージナルな地点に立つことによって人は両者の文  
化から距離をとり意味への問いに目覚め、いわばアルキメデスの  
点に立つことが可能となる。これこそ創造的思想誕生の条件でも  
ある。

日本に於ては折原浩氏によってかかる理論の深化が企てられて  
いる(『危機における人間と学問』)。以下私は折原氏によって触  
発され、マージナル・マン理論の具体的展開として、日本とイス  
ラーム知識人の比較類型学的考察を試みたい。

一般に一個の思想家の内面において、一見対立する二つの価値  
(例えば西欧近代思想と伝統思想、体制と反体制思想、正統マル  
クス主義とスターリン批判後の新左翼という具合に論者は自由に  
設定することができる)の間に葛藤を生じ、異質なものの狭間に  
立つて苦悩した結果、一方の価値基準に自己を同化させ、それに  
しがみついでいくことによって他を排斥する場合(過同調型―折  
原)と、両者の対立緊張を持統してゆく結果、伝統的イデオロギ  
ーないし、エートスを自己革新しつつ第三の道を見出す場合  
(武田清子『正統と異端とのあいだ』)とがあるようである。

一九世紀といえは帝国主義的列強がアジアに向って進出の牙を  
とんでいた時代である。

インドを含むアラブ諸国は既に土足で家の中にあがり込まれる

如く、列強の餌食とされてきた。一方日本は未だ直接的な西欧列  
強の支配を受けるに到らず、後の西欧を上昇目標とする安易な美  
体化と西欧の価値体系の深い検討・吟味なしの受容というマイナ  
ス面の遠因がそこにあるとされている。(折原前掲書)

つまり内部への直接的侵入という形で西欧近代のインパクトに  
遭遇した、日本以外のアジア諸国と中東諸国では自らの伝統的精  
神文化への汚染が深刻であった為に、西欧への対決姿勢も強烈で  
あったといわれる。

此にとりあげる日本の幕末期の思想家、横井小楠とイランのア  
ル・アフガーニーとはいずれも、西欧近代と伝統的価値とのほざ  
間に立つて苦闘した、という意味でマージナル・マンということ  
ができる。

横井小楠(一八〇九―一八六九)はしばしば佐久間象山と共に  
問題とされる。西欧近代に対して徒らに礼賛するのみではなく、  
これに批判的に対決しつつ撰取した姿勢において、象山よりも評  
価されている。例えば象山の格物窮理の理が自然科学的な方向に  
偏し、客観主義的に過ぎたきらいがあったに比し、横井は客観的  
な知識の積み重ねよりも主体的なその把握が重視されるべきとし  
た。この主体的な知のあり方を小楠は「合点する知」と名づけ単  
に「知る」ということから区別している。(森田康之助『外国思  
想の受容と日本―思想的考察』)

単なる西欧近代を実体化による上昇目標とするのではなく、批

判的主体性をもち得た横井は甥左平丸・大平宛の書簡で西欧流の学問というものが技術の練習をするだけで、徳性をみがくことから欠けるきらいがあると批判している。(一言にて是をいへば西洋学校は稽業の一途にて徳性をみがき知識を明にする学道は絶て無じ之、本来之良知を一稽業に局し候へば其芸業之外はさぞかし暗き事と被し察候 『横井小楠遺稿』山崎正董編)

学と生の乖離、科学技術の跛行的な発達による公害その他の近代主義的疎外を目前にする我々にとって、次のように堯舜孔子の道と徳を称揚する横井の発想を今日封建道徳の時代錯誤の主張に過ぎないと笑い棄てることができるであろうか。

明堯舜孔子之道 尽西洋器械之術 何止富国、何止強兵、布大義於四海而已

一方同じく大國の辺境地帯に生をうけ、西欧インパクトに抗したパンイスラミズムの志士アル・アフガーニー(一八三八—一八九七)は科学技術を評価し、これを積極的に摂取することを主張するにおいては日本の開国派、洋学者以上であったが、又盲目的西欧礼賛派を批難することにおいては過激な幕末の攘夷論者以上であった。アフガーニーはフランスの合理主義者エルンスト・ルナンとの対話を通して科学の普遍性と人間における利点を称揚する。しかしアフガーニーにとって最大の敵は内部に居た。当時インドにおいて、無神論を唱導し、英國のものなら何でも有難がる

という風潮が療原の火の如く一部知識人の間に広がって居た。アフマッド・ハーンを指導者とするネイチャリー運動がこれで、アフガーニーはイスラームを根底とする共同体の重大な脅威を此にみた。

いう迄もなくアフガーニーは此に於てイスラームの意義を高調する。正に横井小楠が西洋科学技術の導入には賛成しつつも、根底に儒教をすえる如く。しかし横井が根底にすえる儒教は旧来の「詞章記誦の学」に墮していた藩費時習館のそれではない。新しきものとの出会いはその新しきものを受容するための自らの思想的な立脚地の再検討を余儀なくされ、その結果、旧きもの、従来の思想の内在的変革をもたらす。いわゆる思想の自己変革、横井における儒教のプロテスタンティズム化(市井三郎『近代への哲学的考察』)ともいうべき現象を我々は此に見出しうるであろう。それは他ならぬ、小楠の西欧近代と伝統思想とのマージナルな位置からくるものである。一方アフガーニーもイスラームの思想を西欧近代思想を否定的媒介として大胆に革新し、アブドウの如き継承者を通じてそのさらなる発展がアラブ思想界を席巻(せきりん)していったことは人の知る通りである。

例えばコーランの現代生活への適応の爲の創造的解釈、状況に適した創意工夫、すなわちイジテハードやタルフィクなどの語が示すイスラーム改革主義は、アラブ思想家も又対決型のみならず接木型(武田清子)の人物を生み出しうることをものがたつては

いないだろうか。

しかしアフガーニーのみならず一般に中東の知識人は一般大衆向けの言動と知識人向けの言動とを区別する、いわゆる両刀使いの傾向があるとされる。その意味でイスラームを根底におくべしとする主張も実は大衆向けのスローガンにすぎず、内心においてはヨーロッパの自由主義者と変りはないとする論者もいる。

現代エジプトの代表的文学者ターハー・フセイン（一八八九—一九七一）は三歳で盲目となり、自らの原体験によりエジプト農村社会の後進性を自覚してモダニストとして世に出たことで知られる。すなわち彼の自伝小説アルアッヤームには、伝統主義的エリートスへの子供ながらの疑惑が、コーランを暗記させることを主たる教育内容とする寺小屋での思い出と共に自己表出されている。それには大人の偽善的な世界に対する不逞の精神ともいえるものが垣間見られる。後年ジャヒーリア時代の詩がこれ迄の通説に反して実は大部分は後生の産物であるという研究成果が保守派ウラマー達の憤激をよび筆禍事件に発展したことは、日本の古事記、日本書紀の研究により同様なうき目に会った、つだそうきちと比較される。フセインの場合は自分の盲目の原因であるエジプト社会の医療技術の貧しさに象徴される停滞性によって離反動機を与えられ、西欧主義者へと自己を形成していった過同調型のマージナル・マンといえないだろうか。

マージナル・マンとは二つ以上の価値体系と信念体系のはざ間

に立ち、強烈なるパトスを内に秘め、絶えず自己否定的に状況に抗するところの人間の謂であるとするならば、知識人であるかぎり全てがマージナル・マンということになる。非西欧知識人比較類型学に資すべき素材に不足はない。内村鑑三、西田幾多郎と実存的対話しつつアラブ知人識と比較してみることは今後の課題となる。

（つだそうき・えいいち、アラブ思想史、会員）